



菅原由美、『オランダ植民地体制下ジャワにおける宗教運動——写本に見る 19 世紀インドネシアのイスラーム潮流』大阪大学出版会、2013、viii+336p.

本書は、2002 年に東京外国語大学に提出された博士論文「19 世紀中部ジャワ宗教運動研究——アフマッド・リファイ運動をめぐる言説」に加筆訂正を行ったものである。論文は 2003 年に第 2 回アジア太平洋研究賞を受賞している。

本書が対象とするのは、1840～50 年代に中部ジャワ北海岸のプカロンガン州カリサラック村を拠点として起こったアフマッド・リファイ (Ahmad Rifai) の宗教運動 (以下、リファイ運動) である。19 世紀中葉は東南アジアの植民地後期にあたり、強制栽培制度が展開したジャワでは、伝統的現地人首長の権力が解体して植民地行政に取り込まれ、植民地権力の支配と貨幣経済が農村社会にまで浸透する一方、ハッジ (メッカ巡礼者) とプサントレン (イスラーム寄宿塾) が増加し、農村社会のイスラーム化が進展し、イスラーム指導者 (ウラマー) の中には民衆に支配体制への対抗の言説を提供する者も現れた。

従来、この時期の歴史理解の枠組みは、植民地政庁の史料に基づいてきたが、本書の研究は、これまで欠けていた宗教指導者と現地人首長側の史料をも用いた多角的な検討を行うことで、ジャワにおけるイスラーム史ひいては後期植民地期社会の研究に新しい材料を提供した点で画期的である。

本書は、序章と終章を含む 7 章から成り、巻末に付録として 1846 年プカロンガン州県別ハッジ名簿とリファイ著書リストを付し、さらに、資料編としてリファイの最初期の著書である『シャリフル・イマン』(Shariḥ al-īmān) のジャワ語ローマ字翻字テキスト全文を掲載する。

まず序章では、農民反乱を分析したサルトノ・カルトディルジョの先駆的な研究 (とくに Sartono [1966; 1973]) を主たる先行研究として問題の所在を示す。著者は、サルトノの研究において現地

人首長の視点と宗教指導者の思想の分析が欠如していることを指摘したうえで、本書の課題を、19 世紀ジャワ社会の状況という文脈のなかで、リファイ運動を事例として取り上げ、運動に関与したオランダ政庁、現地人官吏・宗教役人、宗教指導者の 3 者の見解を彼ら自身の声で語らせることに定める。

第 1 章では、現地の社会状況を経済、政治、宗教の 3 面から叙述し、リファイ運動の背景を明らかにする。経済面ではサトウキビ栽培の導入によって現地人首長を介在しない「自由労働者」の賃金雇用が拡大し、政治面では現地人首長 (とくに最上位のプパティ) の権威が失墜する一方、宗教役人パングル (インドネシア語ではブンフル) が植民地官吏としてムスリム住民の対応にあたった。宗教面ではハッジとプサントレンの数が増加した。パングルはウラマーでもあるため、プリアイと民衆の間であって両義的な位置にあったが、19 世紀中葉にはプリアイの一員であったと著者は判断する。

第 2 章では、リファイの経歴と宗教運動の経緯を扱う。1786 年にパングルの家系に生まれたリファイは長じてイスラーム教師となり、メッカに渡って学んだあと、1839 年にカリサラック村にプサントレンを開き、20 年間にわたって著述と宣教活動を続けた。59 年に総督の命令でアンボン島に追放され、76 年頃に死去した。なお、その後もリファイの弟子達は活動を続け、リファイ運動は現在に至っている。

本論が始まる第 3 章では、オランダ政庁によるリファイの活動に対する認識と対応を分析する。著者は、オランダ政庁が現地人首長からリファイを危険とする報告を何度も受けながら、1859 年になってようやくリファイを「狂信的ムスリム」で「国家の治安を乱す者」とみなして追放を決定したのは、1857 年のインド反乱を受けて潜在的な宗教的危険分子の排除という政治的判断が下されたためと結論づける。

第 4 章では、リファイの死去 8 年後に刊行されたジャワ語の文学作品『リパンギ物語』(書名はリファイのジャワ語読み) を分析し、無知で狂信的な異端のハッジというリファイのイメージを現地

人首長層が作り上げたことを明らかにする。『リバンギ物語』は伝統的な韻律形式で書かれたジャワ語の作品で、刊行時には18世紀頃に書かれた有名なジャワ語宮廷文学『チャボレックの書』の後編として出版された。ジャワの神秘主義を説く異端のハッジを宗教役人が論破するという『チャボレックの書』の物語の枠組みを模倣して、『リバンギ物語』は、リファイの蒙昧と無能さを宗教役人がブパティと協力して暴き出すという内容である。植民地政庁によるリファイの逮捕命令で幕を閉じる点に、政庁の権威に依存する当時の現地人首長層の立場が如実に示されている。

第5章では、リファイの主要著書の概要とイスラーム学における位置づけを明らかにする。50点を超える著書は、イスラーム学の基本である神学、法学、神秘主義の3分野をまとめた教本（キターブ）と日常生活にかかわるテーマ別の教本に分けられる。いずれもアラビア語文献の引用とジャワ語による翻訳及び解説の組み合わせという形式をとる。ジャワの農民にとって理解し暗唱しやすく、ジャワ語の部分は平易な韻文形式で書かれている点が特徴的である（表記はペゴンと呼ばれるアラビア文字）。引用された文献には中東の古典文献に加えて東南アジア出身のウラマーによる文献も含まれている。先行研究からリファイの思想はスンナ派の学派に属する正統的なものであったことが明らかにされている。しかし、異教徒であるオランダ政庁に仕えるウラマーを「不義を犯しているウラマー」として痛烈に批判し、上位者への跪拝、飲酒、賭事、ガムランやワヤンなどの伝統娯楽、共食儀礼といったジャワの伝統的価値を否定することで、植民地行政に取り込まれたバングルやジャワ文化を体現する現地人首長にとって、自らの権威に対する挑戦と受け止められたのである。

終章では、論点を総括する。リファイの出現は、19世紀半ばのジャワにおいてアラビア語文献の豊富な知識に基づいて「ジャワ人のための宗教書を書く人物が登場する段階に入っていた」ことを示している。彼によって正当性を脅かされた現地人首長側は『チャボレックの書』を参照することで、「リファイとの戦いを、ジャワで繰り返されてきたとされるイスラーム正統派対異端派の戦いに置き

換え、政治面だけでなく、宗教面においても、自分の立場を擁護し」、ハッジによってもたらされた新たな「イスラーム化の波」に対抗しようとした。他方、オランダ政庁にとって、リファイを国家の治安を乱す狂信的ムスリムと規定することは、インド大反乱の勃発という「国際政治状況の変化によって必要とされ、言説化されていった」。結論として、リファイ運動は、「前世紀から徐々に蓄積され19世紀において加速したイスラーム化の新たな潮流が植民地再編過程に衝突した結果生じた運動」だったのである。

上に見たように、本書の最大の意義は、一つの宗教運動をオランダ政庁・現地人首長層・宗教指導者の三つの視点から多角的に分析し、リファイを「狂信的異端」というレッテルから解放したことであり、各章の論旨も説得的である。また、ジャワ語史料の重要性を再認識させた点は重要で、本文中で原文テキストと的確な和訳が併記されており、著者の論点を確認することができる。しかしながら、先行研究を乗り越えているかという点については、課題を残していることも指摘しておかなければならない。以下の4点にまとめておく。

第1に宗教指導層の視点について、リファイの思想に関してより広い文脈においた考察が望まれる。たとえば、本書ではリファイ運動にタレカット（神秘主義集団）の要素が欠如していることを特徴に挙げている。しかし、サルトノがタレカットを強調するのは1888年バンテン反乱の分析においてであり、農民運動一般の特徴とはしていない。実際、農民運動の文脈でのタレカットの台頭は1880年代以降とされている。したがって、リファイにおけるタレカット的特徴の不在は彼の特殊性ではなく時代性と理解すべきであろう。また、本書では、サルトノがリファイ運動を復興主義に分類していることを批判している（確かにジャワにおいて復興すべき理想のイスラームがかつて存在していた訳ではない）が、サルトノは、イスラームを本来のあるべき姿に戻そうとする傾向をそう名付けており、より一般的には同時代のイスラーム世界の新しい潮流を意識した命名であろう。この点では、むしろ、ラファンの研究 [Laffan 2003] が指摘するように、リファイを東南アジアにおけ

る最初期の改革主義者と理解することが今後の研究に有効ではなかろうか。著者は、あえて「社会学用語」による分析を封印しようとしているが、そのことが時に議論の展開を妨げているように思われる。

第2にプリヤイの視点について、オランダ政府と無条件に結託していたわけではないと指摘しているが、オランダとの関係性を強調する点はサルトルノと変わらない。しかし、この点を前提にしつつ、プリヤイがジャワの伝統的文化の体現者であったという側面にももっと注目してほしいと思われる。なぜならこの側面の批判にリファイ運動の改革主義的特徴がよく示されているからである。

第3に宗教指導者とバングルやプリヤイの関係について、バングルの両義的な位置づけには本書でも触れているが、結論として「サントリ集団と現地人官吏・宗教官吏の溝は決定的」になったとする。この点はサルトルノも同じである。しかし、リファイの父がバングル、祖父がプリヤイであったとされること、リファイの再婚相手が郡長の寡婦であったことなど、在野の宗教指導層とバングル・プリヤイが社会階層として接点を有していたことを推測させる史料が見受けられる。両者の関係については、より深い分析が必要と思われる。

第4に、社会的文脈の中に宗教運動を位置づけるという点で、第1章の経済状況の分析が十分に生かされていない。とくに、藍栽培からサトウキビ栽培への転換について多くの紙幅を割いているが、それがどのような影響を社会に及ぼしたのかは明らかにされていない。著者自身、このような影響を論証することは難しく客観的状况の記述にとどめる旨を述べているが、ここまで禁欲的になることなく、著者としての見解を示して欲しかった部分である。

最後に、これだけの労作であればこそ、編集上の見落としが散見されることが惜まれる。「ジャワ暦」と「ジャワ歴」、「現地人官吏」と「原代人官吏」の表記の混在はそれぞれ前者に統一されるべきである。p.52で「スラカルタのスルタン」とあるが、1857年当時のスラカルタの首長はスルタンではなくスフナンである。p.75の「1950年代」は「1850年代」の誤りである。pp.90-91で報告書か

らの引用部分と本文の間でフォーマットが混乱している。p.94の「リズム」は「韻律」とすべきである。p.95以下のクラーンの節番号はフリュージェル版よりもカイロ版の利用が適当であろう。p.141のリファイの著書の記述が付録のリファイ著書リストと対応していない。これに関連して、物理的な単位としての写本と著作物としてのテキストの区別を明確にすべきであろう。

結論的に言えば、本書は、19世紀ジャワを対象にした社会経済史の精緻な研究の進展に比して立ち後れていた宗教運動研究の分野において、ジャワ語の史料を駆使して新たな展望を拓いた優れた研究成果である。今後の研究は本書への参照が必須となろう。しかし、得られた材料からさらに議論を展開する余地が残されたとも感じられる。本書は、19世紀ジャワにおける宗教運動研究の新しい出発点としてこそ高く評価されるべき業績である。

(青山 亨・東京外国語大学総合国際学研究院)

参考文献

- Laffan, Michael Francis. 2003. *Islamic Nationhood and Colonial Indonesia: The Umma below the Winds*. London and New York: Routledge Curzon.
- Sartono Kartodirdjo. 1966. *The Peasants' Revolt of Banten in 1888: Its Conditions, Course and Sequel. A Case Study of Social Movements in Indonesia*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- . 1973. *Protest Movements in Rural Java: A Study of Agrarian Unrest in the Nineteenth and Early Twentieth Centuries*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

倉沢愛子(編著).『消費するインドネシア』慶應義塾大学出版会, 2013, vi+310p.

この論集は、2012年3月に慶應義塾大学を定年退職した倉沢愛子が若手のインドネシア研究者とともに開催してきた研究会の成果を、現代インドネシアの「消費」を中心テーマにまとめたもので